

チョウウいっぱいの学校に

話題の

最前線

オオゴマダラの飼育・観察活動に取り組む奄美市笠利町の佐仁小学校(根釜文字校長、児童10人)は14日、野生生物保護の功績が顕著な個人や団体に贈られる環境省自然環境局長賞を受賞した。2019年に続き2回目となる快挙。奥園淳一教頭は「受賞を励みに、子どもたちが自然を大切にする心を育んでくれたら」と期待する。『チョウウいっぱい』の学校を目指す佐仁小の取り組み取材した。



佐仁小でオオゴマダラの繁殖・飼育を始めた奥道子さん=12日、奄美市笠利町

オオゴマダラは大型のチョウで、白黒のまだら模様の羽が特徴。奄美以南の地域に広く分布している。佐仁小の校庭に設置された飼育小屋では、幼虫の食草であるホウライカガミや、成虫が花の蜜を吸うペンタス、ランタナなどを栽培している。飼育経験が豊富な高学年は専門家さながらだ。「おなか膨らんでいるのが雌。こがっているのが雄」「これはさなぎの殻。羽化する前は金色できれいだよ」と

オオゴマダラ、児童らが飼育

佐仁小

オオゴマダラの羽をそっと優しく持って観察する佐仁小の児童たち=12日、奄美市笠利町



熱心に教えてくれる。

「児童たちは飼育・観察を通して気になったことを調べたり、作文にオオゴマダラのことを書いたり関心が高い。大事にしているのだらう」と奥園教頭。「私がうっかり成虫を逃がしてしまったりは、児童に怒られましたよ」と苦笑いした。



オオゴマダラ成虫

同校の活動は03年に1匹のオオゴマダラが飛来し、校内で育てていたホウライカガミに卵を産んだことがきっかけ。当時の用務員、奥道子さん(78)＝同集落在任＝が中心となり繁殖・

飼育をスタートした。

飼育小屋では繁殖に適した環境づくりを徹底。血統が同じ個体同士が交配して寿命が短くなるのを防ぐため、奥さんが飼育係を務める龍郷町中勝の大型量販店「ビッグツリー奄美店」植物園内の「蝶ハウス」と、幼虫やさなぎを定期的に交換している。

定年退職後も時々同校を訪れ、児童たちにオオゴマダラの世話の仕方を指導している奥さん。「チョウウは見ているだけで癒やされるので(飼育は)とにかく楽しい。子どもたちや先生の努力に感謝している。活動を通して命の尊さを感じてくれたら」と目を細めた。

同校のキャッチフレーズは「蝶と太鼓と読書の佐仁小」。オオゴマダラの他にも、さまざまな種類のチョウを呼び寄せようと、校内では児童たちがたくさんのお花を育てている。

5年生の山下ひらりさん(10)は「ふ化して卵の殻を食べている小さい幼虫がかわいくて好き」と笑顔。2年生の濱崎知帆さん(7)は「ホウライカガミの水やりを頑張りたい。オオゴマダラを観察して変わったことなどを調べてみたい」と意気込んだ。